

## レジオネラ症の発生動向及び感染源についての考察

◎岡田 佑衣子<sup>1)</sup>、中野 真希<sup>1)</sup>、高橋 雅博<sup>1)</sup>、奥山 啓子<sup>1)</sup>  
栃木県南健康福祉センター<sup>1)</sup>

【背景及び目的】レジオネラ症は細胞内寄生性のグラム陰性桿菌であるレジオネラ属菌 (*Legionella* spp.) による感染症である。菌を含むエアロゾルや塵埃を吸入して発症するため、エアロゾルを発生させる人工環境や循環水を利用した入浴施設などが感染する機会を増やしているものと考えられている。高齢化が進みレジオネラ症の重要性は増加しており適切な鑑別診断に繋げる必要がある。レジオネラ症は感染症法に基づいて、医師に全数届出が義務付けられている。近年、届出が増加していることから管内の発生動向の概要についてまとめ、感染源について考察した。

【方法】対象期間は2014年1月から2023年10月までとし、届出のあったレジオネラ症の発生届について集計した。また2023年1～10月の発生届及び積極的疫学調査内容から感染源について考察した。

【結果】2014年1月～2023年10月の患者数は125人、2017年以降報告数が増加したが、2023年には10月末までに過去最多の20人の報告があり、この時点で前年報告数を上回った。2023年の状況を見ると患者の年齢階級は60歳

代が39.1%と最も多く、男女比では男性が73.9%、職業は、無職、建設業、運送業、清掃員の順に多かった。病型はすべて肺炎型で、診断方法は全例で尿のイムノクロマト法を用いていた。疫学調査結果では、入浴施設の利用は5人21.7%、井戸水使用は4人13.4%、農作業は3人13.0%であった。利用されていた入浴施設の立入調査では問題なく他に発症者はいなかった。

【考察】レジオネラ症は2003年に尿のイムノクロマト法が保険適用となり2005年には日本呼吸器学会の成人肺炎診療ガイドラインにも診断に有用であると記載された。肺炎症状を呈する60歳代前後の男性については、入浴施設等の利用歴がなくても鑑別にレジオネラ症の可能性も考慮し対応して行く必要があると考える。大半の症例は感染源が明らかではない単発例であったが、建築業や運送業等の職業や農作業等も注意していく必要があると考える。

【結語】レジオネラ症は、疫学をより明確に把握し、普及啓発等の公衆衛生対策に繋げる必要があると考える。

(電話 0285-22-1219)